

《研究報告》

在宅看護学教育におけるICFの概念活用についての検討

牧 理砂, 又吉 忍, 鍋島 純世, 西村 純子

梶山女学園大学看護学部看護学科

要 旨

【目的】学生に在宅看護の特徴を踏まえた看護過程の理解を促すためには、ICFの概念を用いることが有効とされているため、ICFの概念活用の示唆を得ることとする。【方法】医中誌webとCiNii Articlesを用い、キーワードに「ICF」、「在宅看護」を指定して、文献検索を行った。分析対象は、抽出された論文のうち、看護教育の場面で検討を行っている論文6件とした。【結果】在宅看護学で重要視している視点が、ICFの概念の一部の側面と共通することについては述べられているものの、ICFの概念の6項目（健康状態・心身機能・活動・参加・個人因子・環境因子）を活用し、在宅看護学における看護展開に使用できるツールの開発には至っていないことが明らかとなった。【結論】在宅看護学の教育におけるICF概念の具体的活用方法を検討していくことの必要性が示唆された。

キーワード：看護教育, 在宅看護, ICF

I. 緒言

日本は世界に類をみない速さで人口の高齢化がすすんでおり、2013年には65歳以上である老年人口が約3195万人となり総人口の25.1%を占めている¹⁾。そして、今後団塊の世代が75歳以上となる2025年には老年人口が3657万人となり総人口の30.3%になると推計されている²⁾。そのような状況の中で、介護が必要な高齢者も増加し、また、国民の在宅移行のニーズも高まりつつある。医療制度においても、在院日数が短縮され、病院から在宅への円滑な移行が重視され、在宅医療推進へと方向転換されている。そのため、在宅において保健・医療・福祉の連携・協働によって、本人・家族の生活の質（QOL）を高めながら療養生活を支える体制をいかに整備していくかが大きな課題となっている。

このような時代背景の中で、厚生労働省は平成20年度看護教育カリキュラムの改正にあたり、看護の基礎教育の充実に関する検討会報告書³⁾の看護師教育の基本的な考え方として「看護の対象者を健康を損ねている者としてのみとらえるのではなく、疾病や障害を有している生活者として幅広くとらえて考えていくこと」、「保健・医療・福祉制度の下で、他職種と連携・協働し、チーム医療の中で看護の役割を果たしていくこと」を示している。よって今後は、人間の健康を疾病や障害を中心としてとらえるのではなく、生活者としてとらえる視点が、看護学の基礎教育において必要になると考える。

在宅看護論⁴⁾では、在宅看護の目的の中に、療養者・家族の自己決定と自助（セルフケア）へ

の支援や、療養者・家族のQOL拡大などをあげている。また、訪問看護師の役割・機能について、援助を通して、対象者の希望に沿った在宅療養が継続できるようにすることとし、在宅療養に臨む際の基本的姿勢で最も重要なものとして、「①療養者・家族の主体性の尊重、②信頼関係、③チームによる援助である。」と示している。

在宅療養の目的は、QOLの向上であり、目標は病状の安定とセルフコントロールである。そのために、看護がどのように介入し支援していくか、看護に求められる役割は大きくなっている。よりよい看護ケアの提供のためには、対象の生活全体をとらえ、課題を分析することが重要となる。また、多職種と連携・協働するためには共通の認識を持ち、その中で看護師の役割を明確にすることが求められている。このことから、学生に看護展開を教授する際、人間の健康を疾病や障害を中心としてとらえるのではなく、生活者としてとらえられるような思考の整理を促していく必要がある。その際、有効とされているのが国際生活機能分類（ICF）の概念である。

ICFは、2001年、世界保健機構（WHO）の総会において、国際障害分類（ICIDH）の改訂版として採択された。ICFは障害を人が「生きる」こと全体の中に位置づけて、「生きることの困難」として理解するという、根本的に新しい見方に立っている。ICFの構成要素は、「心身機能・身体構造」、「活動」、「参加」の3つの生活機能と、「健康状態」と、「環境因子」、「個人因子」という2つの背景因子であり、各項目間に相互作用や複合的な関係があると考え（図1）⁵⁾。上田⁵⁾はそのことにより、生活機能のマイナス面だけでなくプラス面をとらえる視点や、障害が他者を含めた環境との相互作用から生じる相対的なものである、という視点が加わったことが大きな特徴であると述べている。

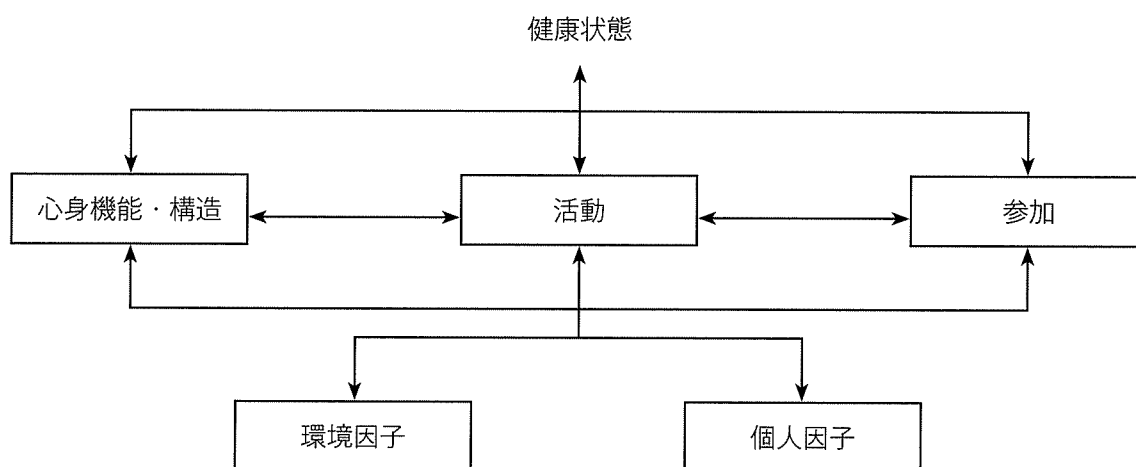


図1 ICF（国際生活機能分類）モデル（2001）

また、久田⁶⁾は、ICFは人々の生活に関連する諸々の機能を、体系的に分類・整理したリストで、生活関連の諸機能を評価する視点を具体化したものであり、また、「生活の質」や「生活水準」などを考える上で不可欠の、「生活」の具体的な把握・評価の有力な方法といえると説明している。そのため大塚⁷⁾は、ICFは、各自の知識や視点から得られる情報やアセスメントをディスカッションするときのツールとして活用でき、異なる専門職が患者理解と目標共有の合意形成にいたることを容易にすると述べているように、ICFは、多職種の共通言語となりうる可能性がある。

ると期待されている概念である。

しかし、医療の現場では、ICFの概念の活用が期待されてきたものの、分類やコード化が難しいモデルであるため、実際には導入されてこなかった。また、看護領域でのICFに関する先行研究は国内外ともに極めて少なく、ICFの概念を具体的に看護学領域で広く活用するには至っていない。そのため、看護の思考過程において、ICFの概念を取り入れていくためには、看護教育の中に取り入れていくことが重要になると考えられる。

そこで、国内の在宅看護学分野の教育におけるICFに関する研究論文の動向について調査し、ICFの概念活用の示唆を得ることを目的に文献検索を行った。

Ⅱ. 方法

医中誌webとCiNii Articles（2015年8月時点）を用い、キーワードに「ICF」、「在宅看護」を指定して、文献検索を行った。その結果、医中誌webでは18件、CiNii Articlesでは7件の論文が抽出された。そのうち、看護教育の場面で検討を行っている論文6件を対象論文とし、内容の調査を実施した。

Ⅲ. 結果

抽出された論文6件についての検討結果の概要は表1の通りである。

富安ら⁸⁾や藤生ら⁹⁾は、在宅看護論・在宅看護学実習における学生の家族支援に関する学習効果について調査を行い、それらの学習・体験によって、ICFのモデルとも一致している在宅の特徴となる【療養者と家族】を1単位として支援することの重要性を理解し、環境因子に着目した家族支援に関する学習効果がもたらされたことを示唆した。そして、篠原ら¹⁰⁾は、老年看護と在宅看護の看護過程の授業において、老人保健施設の入所から在宅療養に至るまでの高齢者の共通事例を用い、ICFの概念を活用した目標思考型を取り入れた看護過程を展開したことによる、学習効果について調査を行い、他職種と連携・協働していくために共有するICFについて、看護過程の展開から考え方の理解が得られたと報告している。

また、岡本ら¹¹⁾は、地域統合実習でのグループワークの際に、ICFモデルを用いてまとめを行い、ICFをとりいれたメリット、デメリットを分析している。その結果、ICFを活用すると相互循環的な思考が可能になり、人が生きるという視点で出会った対象者や対象者を支えるシステムを捉えなおす事ができるようになり、また、多職種がどこでどのようにサポートしているかの理解が促され、今後どこを改善すればいいのか検討できる思考の発展ができていたとのメリットを示した。その一方で、具体的な支援の方法までは明確化されないことや、ICFは相互循環モデルであり、お互いに影響しあっているため、そのつながりを考えようとすると、すべてに関連し、整理がつきにくくなるということをデメリットとして示し、教員の補足説明の必要性を示唆した。さらに、渡部ら¹²⁾は、在宅看護学実習における対象理解を促進するためのアセスメントツールの作成のために、基盤理論の比較検討を行い、ICFの概念は生活場面の重視のため、医療ニーズを満たしていないとの見解を示した。

そして、中村ら¹³⁾は、全国の看護教育機関における在宅看護過程の教授・展開方法についての現状を把握し、その課題と教員が感じている困難を明らかにすることを目的に調査を行った。看

看護過程の教授の際、看護理論・モデルの使用について65%の教員が必要であると回答していた。また、看護過程の教授には70%の教員が既存の看護理論・モデルを用いており、その理論は多岐に渡っていた。しかし、既存の看護理論・モデルでは、家族介護者の視点や、生活者の視点など、在宅看護に特有なアセスメントの視点を教授できないため、教員が独自に視点を追加していることが明らかとなった。

表1 対象文献一覧

番号	1. 著者、年	2. 目的	3. 概要
①	富安真理ら 2007	在宅看護論・在宅看護学実習における家族支援に関する学習効果を明らかにすること。	学習・体験によって、家族支援に関する学習効果がもたらされることが示唆された。そして、家族支援の認識として抽出されたカテゴリは、環境因子の役割を重視しているICFのモデルとも一致した。
②	藤生君江ら 2008	在宅看護論・在宅看護学実習における家族支援に関する学習効果について検討すること。	講義においてICFの概念と一致する環境因子に着目した家族支援に関する学習を行うことで、学生の視野を広げる効果がもたらされた。また、在宅看護学実習を経験することにより、その効果がさらに定着されたことが示唆された。
③	中村順子ら 2009	全国の看護教育機関における在宅看護過程の教授・展開方法についての現状を把握し、その課題と教員が感じている困難を明らかにすること。	看護過程の教授の際、看護理論・モデルの使用について65%の教員が必要であると回答した。しかし、家族介護者や生活者の視点などを教授できる在宅看護独自の理論・モデルが非常に少ないという点が示唆された。そのため、今後は日本における在宅看護の理論・モデルの開発が期待されるとの見解を示した。
④	篠原実穂ら 2012	老年看護と在宅看護の看護過程の授業において、老人保健施設入所から在宅療養に至るまでの高齢者の事例を活用したことによる学習効果を明らかにすること。	ICFの概念を活用した「目標志向型思考」での看護過程の展開を学生が実施することで、その人らしく生活できるよう支援することの必要性を理解できたことが示唆された。また、他職種と連携・協働していくために共有するICFの概念について、看護過程の展開から、考え方の理解が得られた。
⑤	岡本響子ら 2013	ICFのモデルを活用し、地域統合実習に取り入れたメリットとデメリットを分析し、今後の地域統合実習のあり方について示唆を得ること。	ICFを活用すると相互循環的な思考が可能になり、また、多職種の理解が促され、今後の課題検討ができるとのメリットが示された。その一方で、ICFは相互循環モデルであり、思考の整理が困難とのデメリットが示され、教員の補足説明の必要性があることが考えられた。その上で、ICFの活用方法の検討が必要であり、さらなる教育方法の開拓が今後の課題となるとの見解を示した。
⑥	渡部洋子ら 2013	在宅看護学実習における対象理解を促進するためのアセスメントツールの作成。	在宅看護学実習におけるアセスメントツールの作成のために、基盤理論の比較検討を行い、ICFの概念は生活場面の重視のため、医療ニーズを満たしていないとの見解を示した。そして、学生が在宅看護学実習で、連携・協働の必要性や、家族の理解などの学習効果を上げるアセスメントツールの検討が求められることが示唆された。

IV. 考察

1. ICFの概念との共通性

在宅看護学において、わが国の在宅看護の歴史のなかでも大切にされてきた療養生活（ADL、IADLなど）への支援、在宅療養生活への希望（主として「参加」の部分に相当）への支援として表現されてきたことは、ICFの視点と共通する。また、保健・医療・福祉の幅広い分野の従事者が、療養生活の機能や疾病の状態について共通理解しやすい概念となっている。このことから、在宅看護論¹⁴⁾では、ICFの概念図に、在宅看護で扱う情報を加筆したもの（図2）を提示し、ICFを利用した情報の整理について示している。また、地域看護概説¹⁵⁾においても、ICFの概念

図に具体例をいれた概念図を示している。このように、先行研究の結果からも、療養者のニーズに沿った生活支援や、療養者と介護者に対する家族支援などを行う際に重要視している社会的側面と、ICFの概念の6項目（健康状態・心身機能・活動・参加・個人因子・環境因子）は共通しているといえる。

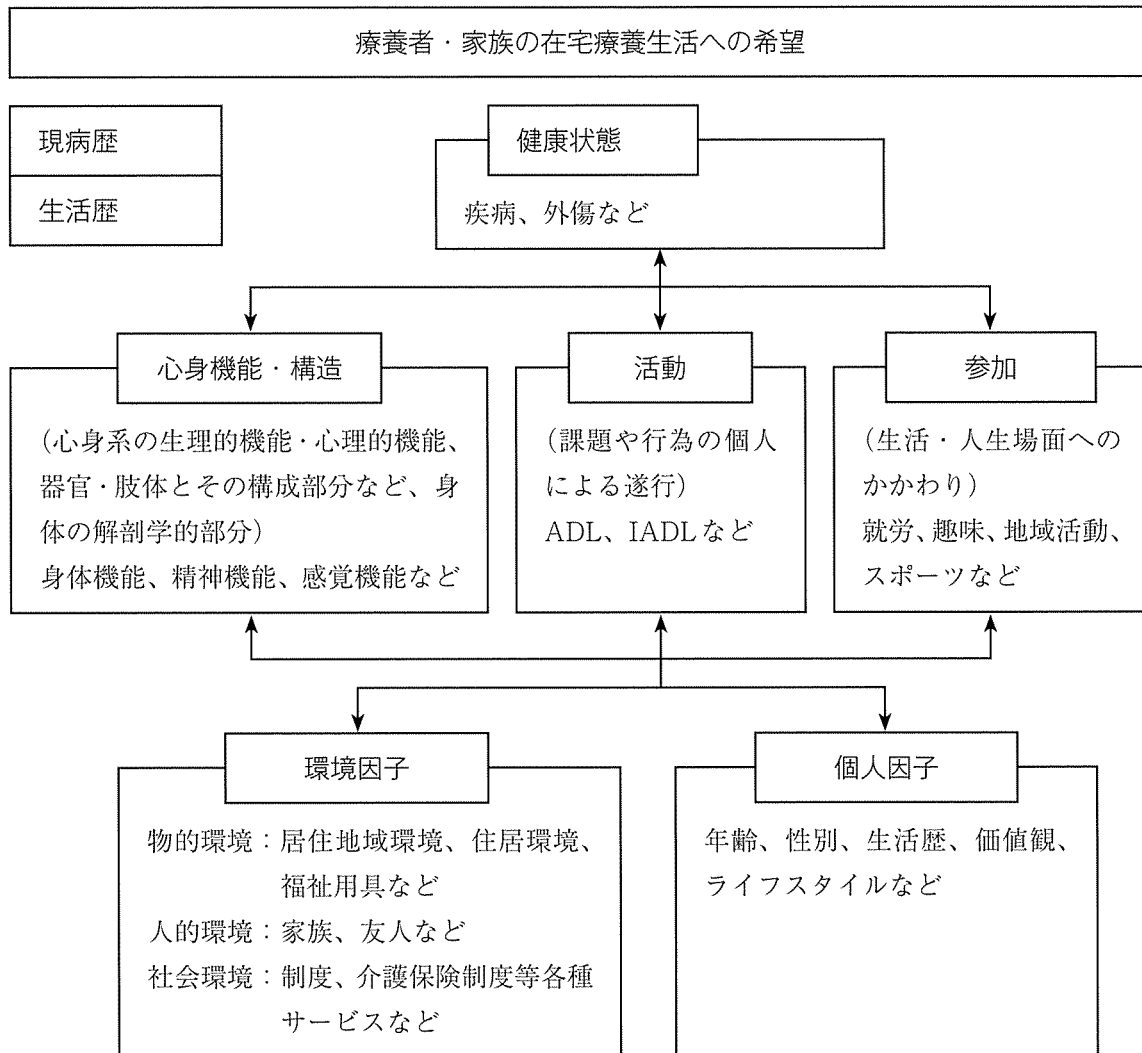


図2 ICFの概念図に、在宅看護で扱う情報を加筆したもの

2. ICFの概念活用の意義

ICFの概念を踏まえて、在宅看護に必要な視点を教授することは有効であると考えられる。なぜなら、学習途上で思考過程が未熟な学生は、疾患や障害に目がいきやすく、ともすると、療養者の生活や家族に対する視点を見落としやすい。そのため、在宅看護学を担当する教員にとって、学生に生活全体を捉える視点の重要性に気付かせ、いかに習得させるかということは、大きな課題となっている。しかし、松澤¹⁶⁾は、ICFの分類枠組みは看護実践的にはかなり使い勝手が悪いと述べている。また、渡部ら¹²⁾は、ICFの概念だけでは、身体面の情報収集・アセスメントの視点が弱くなりやすいと指摘している。さらに、中村ら¹¹⁾の調査結果からも、在宅看護学の教育にお

いて、既存の理論やモデルをそのまま用いることに困難が生じていることが示唆されている。そのため、具体的にICFの概念にある生活機能の視点などを網羅した、在宅看護独自の理論やモデルを開発していくことが期待されている。

3. 看護学教育における先行研究

近年、他領域の看護学教育において、ICFの概念を導入した検討は、少しずつではあるが、行われてきている。精神看護学では、心光ら¹⁷⁾が、「思考過程習得のための支援は重要な課題となり、教育の果たす役割は大きい。研修や授業に加え、実際に看護を行っている途中段階で、実施者自らがICFの視点から振り返り軌道修正をしていけるような、形成的評価のツールがあれば、それは思考過程の習得の助けとなる」とし、看護学へのICF導入の足がかりとして、精神看護学実習で用いることができる看護過程自己評価表の開発を試みている。そして、心光ら¹⁸⁾は、学生が、患者の問題点ばかりを見つけようとし、患者の健康的な側面についての情報は、看護援助に関係のないものとして捉えることが多く、健康的側面の維持向上に重きを置くウェルネス型の看護診断名が、学生からあげられることはほとんどなかったため、精神看護学実習の記録様式にICFの視点を導入した。その結果、学生が患者主体、環境の視点を意識して実習に取り組めたと報告している。また、松澤¹⁶⁾は、看護モデルの主要な部分を軸としつつ、それにICFの要素を加味した「ICF修正型相互作用看護モデル」を考案し、今後、精神看護学実習に使用し、その妥当性の検討をすすめていくとしている。

そして、老年看護学では、箱石ら¹⁹⁾が、ICFの概念を活用した目標志向型思考の看護過程の授業を行い、その後臨地実習で目標志向型思考の看護過程を実践させ、学生の気づきについて調査している。その結果、「学生は高齢者との関わりや援助をとおして、加齢の変化や疾病もその人の特徴や個性であり、本人が満足した生活を送っていることがその人にとっての健康であることに気付いていた。」「学生は目標志向型思考により、高齢者の持っている力に視点をおいたことで、できることまで援助していた自分に気付くことができた。」「高齢者の持っている力を見極め、必要な部分のみ援助を行ったり、待つというような援助の幅が広がっていた。」と報告している。

4. 今後の課題

これらのことから、在宅看護学においても看護過程を展開する際に、多職種と連携・協働しながら、療養者の価値観・ニーズを把握した上で、生活者としてとらえ、家族も含めて介入していけるような思考過程が重要であり、その思考を促す際に、ICFは有効な概念となる。そのため、ICFの概念を活用し、在宅で実践的に用いることが可能な、妥当性の得られるツールを作成することには大きな意義があると考ええる。

V. 結語

先行研究の検討により、在宅看護学においてICFの概念を活用することは、今後さらに重要となると考えられる。本学の在宅看護学では、看護過程展開の記録に、関連図を取り入れているが、在宅の特徴である生活の視点を見落としやすい。欧米では、看護展開を行う際、問題解決型学習方法のツールとして関連図を用いており、看護教育の有効な方法として評価されている。関連図を作成することは、看護介入までのプロセスのひとつとして、学生の思考を具体化する方法であ

り、様々な情報を整理し、限られた学習時間の中で、情報を吟味するのに有効な方法である。先行研究の結果も踏まえ、「健康状態」については、医学的視点を中心に置きながらも、ICFの概念を取り入れた関連図のマニュアルを作成し、学生に示すことによって、学生の学習効果を向上させることができると考える。そこで今後は、マニュアルの作成を検討するとともに、そのマニュアルを使用した在宅看護学演習・在宅看護学実習における学生の学習効果を評価し、その信頼性・妥当性を検討していきたい。

文献

- 1) 国民衛生の動向2014/2015、一般財団法人 厚生労働統計協会、2014
- 2) 国立社会保障・人口問題研究所：日本の将来推計人口－平成24年1月推計の解説および参考推計（条件付推計）－、2014
- 3) 厚生労働省：看護基礎教育の充実に係る検討会報告書、17、2007
- 4) 杉本正子、眞船拓子：在宅看護論－実践をことばに－、ヌーヴェルヒロカワ、58-59、2014
- 5) 上田敏：ICFの理解と活用－人が「生きること」「生きることの困難（障害）」をどうとらえるか、きょうされん、15-31、2015
- 6) 久田信行：国際生活機能分類（ICF）の基本的概念と評価の考え方－「生活機能」と「潜在能力」を中心に－、群馬大学教育実践研究 別刷、(28)、179-191、2011
- 7) 大塚真理子：ICFと今後の看護の方向性、訪問看護と介護、15（12）、954-957、2010
- 8) 富安眞理、鈴木ちえみ、長澤久美子、蒔田寛子、藤生君江：在宅看護論における家族支援に関する学習効果の検討－学生の家族支援の認識に焦点をあてて－、聖隷クリストファー大学看護学部紀要、15、35-43、2007
- 9) 藤生君江、神庭純子、富安眞理、鈴木ちえみ、長澤久美子、蒔田寛子：在宅看護論における家族支援に関する学習効果の検討（2）－学生の介護者の自己実現に対する認識に焦点をあてて－、岐阜医療科学大学紀要、(2)、15-20、2008
- 10) 篠原実穂、尾崎美恵子、吉新典子、箱石文恵、原嶋朝子：在宅療養者の継続看護に焦点をあてた看護過程の展開による学生の学習効果－老年看護と在宅看護の共通事例を活用して－、第42回日本看護学会論文集 地域看護、233-236、2012
- 11) 岡本響子、森下歩、林君江：地域統合実習の学内実習にICF（国際生活分類）モデルをとりいれて－ICFを用いたメリットとデメリット－、看護学統合研究、15（1）、1-7、2013
- 12) 渡部洋子、角谷あゆみ、山崎ちひろ：在宅看護学実習に求められる対象理解と学習支援－基盤理論の比較とアセスメントツールの検討－、中京学院大学看護学部紀要、3（1）、59-75、2013
- 13) 中村順子、木下彩子：全国看護教育機関における在宅看護論の看護過程教育に関する調査研究、日本赤十字秋田短期大学紀要、(14)、35-41、2009
- 14) 河原加代子：在宅看護論、医学書院、76、2015
- 15) 眞船拓子、杉本正子、丸山美知子、西田厚子：看護師教育のための地域看護概説－公衆衛生看護を含む地域の看護に取り組むために－、ヌーヴェルヒロカワ、17、2012
- 16) 松澤和正：看護への問いをいかに育てるか「ICF修正型相互作用看護モデル」の試み、精神科看護、39（1）、20-26、2012
- 17) 心光世津子、遠藤淑美、諏訪さゆり：精神看護学実習のためのICFの視点を取り入れた看護課程自己評価表の開発、日本精神保健看護学会誌、19（1）、74-83、2010
- 18) 心光世津子、遠藤淑美、諏訪さゆり：精神看護学実習にICF（国際生活機能分類）の視点を導入する試み、精神科看護、39（5）、41-49、2012
- 19) 箱石文恵、吉新典子、原嶋朝子：ICFを活用した目標志向型思考の老年看護学実習展開における学生の気づき、第44回日本看護学会論文集 看護教育、118-121、2014

Evaluating the ICF Concept Use for At-Home Nursing Care Training

Risa MAKI, Shinobu MATAYOSHI, Sumiyo NABESHIMA and Junko NISHIMURA

Sugiyama Jogakuen University School of Nursing

Abstract

[Aim] The use of the ICF concept has been effective in promoting the understanding of the nursing care process based on the characteristics of at-home nursing care for students. **[Methods]** Thus, Ichushi-Web (web-based medical journals) and CiNii articles were used, and *ICF* and *At-Home Nursing Care* were designated keywords to perform document searches in order to be able to demonstrate the use of the ICF concept. Six (6) research papers among those selected to be evaluated from the perspective of nursing care training were targets of the analysis. **[Results]** As a result, while the sharing of some facets of the ICF concept were described in terms of the viewpoint emphasized in at-home nursing care studies, six (6) items from the ICF concept (health condition, mind & body function, activity, participation, individual factors, environmental factors) were used, revealing they did not lead to the development of tools for use in advancing nursing care for at-home nursing science. **[Conclusion]** The urgent task hereafter is to evaluate the methods for utilizing the ICF concept in at-home nursing science training.

Keywords: nursing care training, at-home nursing science, ICF